

# 県北 どらくろあ

第3号 2016年6月1日（毎月1日発行）

## 県北群星伝①「神楽面の匠」

大田好二よしじ 94歳（庄原市高野町）

大田好二さんが地域の老人会の手芸教室で、神楽面の制作を始めたのが七十歳のとき。当初は四十人の仲間がいたそうだが、長く続いたのは三人だけ。それだけ神楽面の制作は面倒で、根気と熱意が不可欠なのだ。

粘土で型を作り、乾燥させてから石州和紙を幾重にも貼り重ねてゆく。型を破碎して面の素地を取りだすと、目鼻の穴を開け、胡粉で下地塗りをする。下地が完成すると、いいよいよ彩色、これで命が吹き込まれる。毛の必要な面は

は、毛植えの作業。馬毛やヤク毛を使い、黒、白、茶など面の種類に応じて植毛していく。どの工程、作業にも、細心の注意が必要だ。とくに彩色は絵心が必要で、眉毛一本の線の太さや筆勢で、印象がガラリと変わってしまう。

ある段階に達すると、それで満足してしまうのが趣味の世界だが、好二さんは違っていた。本場である石見の工房を訪れて、教えを請うたのだ。コネもなく、門前払いが続いた。唯一、まともな対応をしてくれたのが、江津市にある

太田民芸店。

好二さんは粘った。自分で作った米を送り、酒を持参して、自分の熱意をわかってもらおうと努力した。やがて、信頼が生まれ、太田民芸店の太田幸生さんとは兄弟分の付き合いになり、プロの指導やアドバイスを得て、好二さんの技量は飛躍的に向上。その出来栄えに、注文の依頼も入るようになり、比和の吾妻太鼓では、今でも好二さんが制作した面が使われているという。

物作りへの興味は子供の頃からで、手先が器用だった好二さんは、十七歳のときに狭き門を突破して、呉海軍工廠に入る。戦艦大和の建造で有名な造船所で、好二さん自身、後年、大和の乗組員として、艦船の第三砲手を担っていた。太平洋戦争の珊瑚海海戦、ミッドウェー海戦と、戦史に残る激闘の生還者でもある。

好二さんは有名人だ。新聞・雑誌で取り上げられたことは数多く、テレビでもNHKをはじめ、地元ですべての局に登場している。好二さんの面には、それだけ周囲を圧倒する迫力と、深遠な魅力に満ち

ている。好二さんが制作するのは石見面ではなく、出雲面、九州の日向面と自由自在。匠の技を存分に発揮している。面を飾る額には「大田 厳山」と揮毫してあり、これは好二さんの尺八の師範としての名前（竹号）。一芸に秀でたる者は多芸に通じる、ということか。

現在、九十四歳の好二さんは、体調を崩していることもあって、面の制作はしばらく休んでいる。しかし、製作途中の面もあって、神楽面にかける情熱は健在だ。取材には、同居している長男、大田徳三さんに同席してもらい、好二さんの記憶を補佐していただいた。

「わたしも挑戦しましたが、絵心がないのでとてもおやじの域には到達できないと断念しました」と徳三さん。

玄関の壁一面に飾られた好二さんの作品群を眺めていると、人間の可能性について考えさせられた。これだけのものが作れる人は数少ないだろう。しかし、その可能性に年齢制限はない。人は何歳からでもスタートできる、そう強く思った。



# シートン『シートン動物記』

## ——けだものが友だちになった

大人になってもずっと、動物が友だちのように思えるのです。子どもの時に夢中で読んだ本は、心の中に居続けるのですね。私は、小学生の時に知った『シートン動物記』を大人になるまで読み続けました。ネットで見ると、この本は今もたくさんの出版社から出ていて人気があるようです。

一番にひかれたのは、なんといっても「オオカミ王ロボ」です。「わずか5頭」の手下を連れて、米国ニューメキシコ州の北部にあるカランボアの牧草地をあらしまくる大きな灰色オオカミです。かつて宮崎駿の長編アニメ映画「もののけ姫」が評判になりましたが、この姫を乗せて走り回る巨大な山犬（犬神）が私にはロボに思えました。

本では「ずるがしこい」とありましたが、私は不満でした。岩だらけの草原は、ロボにとっても生きる場所です。ありつたけの知識を使って、銃を持った「ずるがしこい」人間と対決していたのです。だから対等で「たくましく、かしこい」と言っ

てほしかったのです。草原を駆けて英雄になったジンギス汗と変わりありません。伴侶を助けようとして捕

ナダ・トロントの郊外の松林に住んでいます。シートンは、一群を率いて外敵と戦い、子育てや遊びをする様子をつぶさに観察します。

シートンは「カラス語」があるとみて、「銀の星」が発する警戒の声、指示の声、挨拶の声などを音符にし

世界の古典文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の少年少女たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介していきます。

### また読んでみたい本③

#### ——少年少女たちへ

音谷 健郎



【旺文社文庫】

第3回目はシートンの『シートン動物記』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を歴て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

まるロボは、やはり英雄でした。

「動物記」には、オオカミやクマ、ウマ、山ヒツジといった大型の動物ばかりではなく、リスやウサギの小动物も登場しました。忘れられないのがカラスの「銀の星」です。一群を指揮するこの賢い老カラスは、カ

て採録しているのです。これを見て、私は大きくなったからカラス語を全部

解明して、鳥語が分かる人間になりたいと思つたものです。でも、いまだにシートン以上にカラス語に挑戦した人を知りません。

シートンは他にも、「銀の星」が川

辺で、貝殻や光るものを集めて、くちばしで放り上げたり、裏返したりする姿を見つけています。カラスの「趣味」だろうというのです。私は地上のカラスを見つける度に、じつと様子をうかがうようになりまして。けれど、まだ有効な観察に至ってはいません。

シートンは英国に生まれ、子どもの時にカナダの五大湖付近に移住し、晩年には米国ニューメキシコ州に暮らします。どこに居ても森の自然を愛しました。それらの土地で見聞きしたことを、動物記に書いたのです。

私が初めて読んだのは、庄原の「友安さん」という貸本屋さんでした。ミカン箱くらいの紙の箱に本を詰め、大きな風呂敷で背負い、家々を回っていました。いい本が出ると「これどうですか」とすすめるのでした。私は母親にねだって借りてもらいました。今調べると、私が読んだのは内山賢次訳の新潮社版の8巻本だったようです。

シートンが動物について書いた作品は多く、本によってどの作品を載せるかは様々ですが、「オオカミ王ロボ」と「銀の星」は定番のようです。



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

## 「ピアノの森」

一色まこと 著 講談社

今まで読んだなかで、おもしろかった漫画はたくさんあるが、いちばん感動した漫画は「ピアノの森」だと即答できる。去年の12月に26巻が刊行されて、18年間にわたり描かれてきた物語が完結した。劣悪な環境で野生児のように育った一ノ瀬海が、ピアニストとして成長してゆく姿が、情感たっぷりに描かれている。主人公の海はもちろん、登場人物のキャラや絵柄が魅力的。



最近、映画や小説で悲惨な物語に付き合うのが辛くなった。とかくにこの世は住みにくい……、ならばせめてフィクションの世界では幸せな気分になりたいもの。大団円、ハッピーエンドのラストシーンは大満足で、笑顔で泣いてしまった。

## 「夢果つる街」

トレヴェニアン 著 角川文庫

ハードボイルド小説の傑作。カナダのモントリオールの猥雑な一地区「ザ・メイン」に君臨するラポワント警部補の単一視点で、最後まで描き切っている。殺人事件の捜査が縦軸だが、吹き溜まりの街で、破れた夢を抱えて生きている住人たちの日常が丹念に描写されている。生きることの過酷さや悲哀がじわじわと滲みだしてくるような文章は、北村太郎の名訳も寄与している。



ラポワント警部補は、何度も何度もため息をつく。それでも、自分の街を愛し、住人たちを守ろうとする。くたびれた初老の守護天使に、まだ青年だったわたしは、人生の芳醇な味わいを教えてもらったような気がした。醜態したのだ。

## 「手紙屋」

喜多川泰 著 ディスカヴァー

就職活動に悩む大学4年生の主人公が、とあるカフェのチラシで知った「手紙屋」と文通を開始する。10通の手紙をやりとりするだけで、夢を実現する手伝いをしてくれるという。

この「手紙屋」の目的は、「目先の就職活動の成否よりもその先に待っている人生を、自分らしく生きることの方がはるかに大切なことです」(作者のあとがきより)。説教臭くて理想論、



世の中はそんなに甘くない、これは詭弁だ、そんな反発を抱きながらも、最後まで読了。そして、「手紙屋」の言葉を信じたいと思っている自分に驚いた。それだけの説得力を有している。若い人にぜひとも読んでもらいたい本なのです。

《サンプル広告》

## 土井漢方薬局(平成27年12月オープン)

あなたにあった漢方薬をお作りします。また、処方箋調剤も受け付けております。足腰の悪い方にはご自宅まで配達もしておりますので、ぜひご利用ください。

東洋医学と西洋医学を専門に学んだ鍼灸師免許をもつ薬剤師が地域の皆様の健康を守り信頼されるかかりつけ薬局として誠実にご相談に応じます。

▶営業時間：9時～18時まで

▶定休日：日曜/祝日

▶電話：0824-55-6461

▶場所：三次市南畑敷町38-4

※お車でご来店の方、「カメラのサエダ」「ムラタケ」を目印にお入りください。

巨石のオブジェが見えてきた。自分の背丈のゆうに三倍はありそうな石柱が、屹立している。ずっと畏敬するようなイメージを抱いていたが、風雨にさらされて、角が丸みを帯びた石柱は、どこか先祖の墓石を前にしたような親しさを覚えた。

(子供だったんだもの)

薫子は苦笑した。父親の庄蔵に連れて来られたのが、まだ七歳のときだった。山道の隘路に途中で音を上げて、父親に背負われて登攀した。広くて逞しい背中に、涙や鼻水を擦りつけるようにして、懸命にしがみついていたのを覚えている。汗とタバコのおいがした。

「(ん)が原出雲か」

巨石を見上げて、庄蔵が呟くようにいった。

「(ん)が神話の聖地だったら、神楽の聖地でもあるわけだ」

天の岩戸に引きこもった太陽の神、アマテラスオオミカミを誘いだすために、アメノウズメが踊った舞いが、神楽の起源だといわれている。

「よし、いっちょようやったるか」

庄蔵は、来た道を少し引き返すと、大きな平べったい岩の前で靴ひもを外し始めた。靴下も脱いで裸足になると、ペットボトルの水で、足裏を

清めた。そして、平らな岩の上によじ登ると、すくと立ち上がった。五月晴れの空に向かって両手を差し出した。

「八百万の神々に奉つらん」

一礼して、ゆるやかに踊り始めた。

「岩戸」のアメノウズメの優雅な舞いだ。庄蔵は、安芸高田市にある神楽

団の副団長を務めている。両手がゆる

ている演目だ。疫鬼を退治する蛮勇の神、鍾馗の踊りが始まった。武骨で力強い舞いである。その動きが唐突に激しくなった。疫鬼との戦闘シーン、剣舞である。薫子は、庄蔵の手に握られた神剣・十握剣の煌めきが見えるような気がした。

あれから二十年近くの歳月が流れている。今、薫子が見上げる石塔の

## 「天の岩戸」

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子③

※県北の歴史や風物を題材としたファンタジー小説です。

るやかな弧を描き、ゆったりとしたステップを踏む。薫子は、笛や太鼓、鉦の神楽囃子が聞こえてくるような気がした。

庄蔵の顔が一変した。たおやかな

表情が凛々しく引き締まり、眉間にしわを寄せて、目をカッと見開いて睨みつける。「鍾馗」の顔だとすぐにわかった。庄蔵がいちばん得意にし

うとしている。

「容態は安定してはいますが、意識が戻らなければ、植物状態になる可能性もあります」

担当医の説明を、他人ごとのように聞いていた。あの頑健だった父親が、このままくたばるはずはない。頑固で気は短い、故郷が大好きで、神楽を愛し、仲間を信頼し、みんなから慕われている庄蔵が、神様から見放されるはずはないではないか。

しかし、庄蔵は昏睡したままだ。死人のような青白い顔を見ていることができずに、薫子は病院を抜け出した。庄蔵のランドクルーザーに乗り込むと、目的もなく走らせた。そしてたどり着いたのが、葦嶽山だった。土地勘もない薫子が、地図やナビに頼ることができず、この思い出の地に到着することができたのは、天啓に導かれたような気がした。

ここが「古事記」に記されているような神話の世界であったのならば、黄泉の国へもどこかで通じているのではないか。昏睡状態の父親は、死者の国への入り口で彷徨っているに違いない……。

薫子は、雨に濡れた衣服を脱ぎ棄てて全裸になった。携帯電話のネットワークを首にかけてみると、猫の



ような身のこなしで平たい岩の上に立った。かつて父親が神楽を舞った岩棚で、古代のドルメン（供物台）ではないかといわれている。

薫子は、シャワーのような雨を全身に浴びて、体を清めた。一礼すると、ゆったりとしたステップを踏み始めた。「岩戸」のアメノウズメの舞いだ。続いて、「鍾馗」の舞い。稲妻が走り、落雷の轟音が鼓膜を震わせたが、薫子は怯むことなく舞い続けた。「葛城山」の土蜘蛛の舞い、「紅葉狩り」の平維茂の舞い……。女である薫子が舞台で演じることは叶わなかった。

いつまでもいつまでも踊り続ける。頭の中で響いていた神楽囃子が、ギターの色色に変わった。フラメンコのリズム、薫子はスペインに渡り、プロのダンサーとして生活している。女でも対等以上に活躍できる世界に憧れたのだ。

フラメンコのステップを踏み、体を揺り動かす。日本の神様に頼んでもだめなら、外国の神様にお願いでやる。ジプシーから生まれたフラメンコは、信仰のための舞踏が起源だともいわれている。

全身に雨を浴びながら、薫子は踊り続ける。上気した肌が、光沢を帯びて輝いている。いつしか踊りは、フラメンコも神楽も混然一体となり、トランス状態になって舞っていた。神楽もフラメンコもなかった。原初の、魂の舞踊だ。大好きな父親を自分の踊りで呼び戻す、一途な思いがあるばかりだ。

薫子の動きがピタリと止まった。本物の神楽囃子の音が響いている。薫子はあわてて、背中に回っていた携帯電話を掴んで耳に当てた。

「お父さんの、お父さんの意識が戻ったよ」

母親の興奮した声が聞こえてきた。

「それが、おかしいのよ、裸の薫子が迎えに来てくれた、いうてね」  
いつの間にか、満天の星が輝いている。

※「葦嶽山」庄原市の東部、本村町に位置する山。どの方向から見ても三角形に見える山頂と、人工的に積み上げた土しか思えない巨石群から、古代遺跡ではないかといわれている。ピラミッド研究家の酒井勝軍が、昭和九年に葦嶽山を現地調査。葦嶽山は世界最古のピラミッド本殿で、北側の尾根続きにある鬼叫山が拝殿であると発表、センセーショナルな話題となった。

平成九年には、作家の荒俣宏が、漫画家の水木しげると共に「日本ピラミッド」の地を訪れ、「ここが原出雲の聖山だったか！」と感激している。古代の巨石信仰では、石は神の依代よりしろとなり、死者を封入する家ともなる。葦嶽山の巨石群の中にある表面が磨き上げられたような鏡岩は、魂を行き来させる媒体であり、「石に宿った霊や神が、その表面にテレビのブラウン管のように浮かびでるのだ」との仮説を表明している。『水木しげるが行く妖怪極楽探検隊』（荒俣宏著、角川書店）参照

## どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

### どらくろあ

ホームページ始めました！

バックナンバーも掲載しているので、  
ダウンロードしてお楽しみいただけます。

<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

## 《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
  - 教室&講座案内
  - イベント情報
  - あなたの大切な本の紹介
  - ボランティア・ライター(現地記者)募集！
- どらくろあで地元の記事を書いてみませんか？

※応募先はどら書房・赤川まで。掲載は無料です。

## どらくる俳壇

子の傘は玩具の類梅雨兆す

近藤 昌平

芭蕉句碑つかず離れず夏の蝶

原博己

塵芥棄てるひまなし箒草ちりあくた ほうき

赤川冬人

※投句を歓迎します。

## 投稿&寄稿

「臨終を迎えた文豪の本音、再考」

近藤 昌平

遠藤周作の『死について考える』は昭和六十二年九月4刷とありますから、もう三十年ほど前に、私が何時か読むべく買い求めた本です。それを最近になって偶然、書棚で見つけて、何気なく読んでみて驚きました。

宗教の信者となったものは確信を保持しているという誤解があります。倉田百三の嘆きは「信仰があればこそその嘆きで、恥でも何でもない」というのです。

先月号に「臨終を迎えた文豪の本音」を書きましたが、どうやら私も誤解者の一人だった様な気がして、申し訳なく思うのです。

百三のふるさとの池蓮の花

倉田百三が死の床で「どうしても浄土が思い浮かばぬ」と嘆いた話について、「疑いがあるから信仰なんです。宗教に何の関心もない普通の人だったら、そんな嘆きは言わないでしょう」と述べています。

今月のどらさん



この絵をブックカバーにしています。

絵・風太

「ポピーひなげし(雛罌粟)」富久光

花茎の首を深く垂れ

咲き時を待っているポピー

ある朝

紙より薄いオレンジ色

の花が咲いた

五月の風を楽しむかのように

幼子が手足を振り動かすように

花びらが踊った

やがて

人知れず散るポピー

蕾と見まがう種子袋を

膨らませ

申し合はせたように

米の一字を天辺に印して

## 編集後記

◇「どらくるあ」3号をお届けします。今号から「県北群星伝」をスタートさせました。県北エリアで活躍されている『地上の星』を紹介する企画です。自薦、他薦に関わらず、幅広い分野の情報を募集しています。

◇インターネットで本誌が閲覧できるようになりました。「どらくるあ掲示板」で、ホームページのアドレスを載せています。

◇まだまだ認知度が低いこともあって、原稿がなかなか集まりません(苦笑)。県北エリアの郷土史などの連載があれば、情報誌としての『重み』が出るのですが。こちらも自薦、他薦は問いませぬので、ご連絡をお待ちしています。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail:touzin@sannet.ne.jp

年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン：ROUTE183

協賛：九日市愛好会

# 九日市だより

## 九日市の歴史②

九日市愛好会 会長 寺岡隆行

現在、三日市の地名が残っている所で毎月、三日の日に市が立っていました。九日市はもともと現在の七塚駅のあたりでしたが、物々交換で賑わった庄原へ移ったのか、或いは、移したであろうと言われている、この点は判然としていません。

庄原は、他の城下町とは成因を異にし、野っ原の様な地で海産物と農産物の物々交換から発展した町です。交換市が庄原の町の原点であると言っても過言ではないでしょう。

棧敷屋四代目甚兵衛が壮年の頃、元和・寛永の乱以後、山賊が多く奥里の通行が難しく、塩など不自由になり、甚兵衛が人夫に馬を引かせ、自身も付き添い尾道に通い、塩その他の海産物等を持ち帰り、奥筋へも商売したと伝えられています。

この様に、市が盛んに立ってくると、先ず「造り酒屋」が繁盛するので、天野屋（本伊藤）とか、胡物屋（本田邊）等は著しい発展であったでしょう。

それに続いて、多忙を極めたのは、「煮売り屋」という飲食店であり、一方、宿屋とか置屋と称するものは、隅にはおけぬ、しろ物となるわけで、戦前迄、これらは、他地を遥かに抜く優勢さであった

のが、庄原の姿でした。

明暦二年（一六五六年）二月に、町の下三分の二を焼失しており、此の頃になると、かなりの町屋敷が並んでおり、町としての機能をなしていた様です。また、延宝三年（一六七五年）四月並びに天和二年（一六八二年）八月に市街地の大半は焼失したのですが、その時代の最も繁盛していた頃の表通りの商家は、六十八戸連なっていたと伝えられています。

文政五年（一八二二年）二月十日に御回し覚えとしての「市日に於ける規定」には、九日市の決まりについて、町役人からの通達が次の様に出ています。

「これまでは、九日市に他所者に、直接相對に敷地を貸していたし去年の盆市にも他所者へ貸していた所が、相手や周囲の事情をかえりみず自分勝手にする我儘な事があり、これからは、宿をとらなかつた者へは、貸してはいけない。そして、喧嘩口論などあった時は、宿を貸した者が万事引き受ける事。以上を守るよう心得る事。町中の関係者へ印判を押して通達し回す事。」

江戸後期には、山内東村、山内西村、山内北村からは、莫産・菅笠、峯田村、春田村、上谷村からは、薪・麻が出品さ

ていました。

隣の三日市と商圏争いがあったて、紛争が絶えなかったもので、文政六年（一八二三年）には、代官・頼杏坪（らいきょうへい）が三日市と九日市を和解させたと伝えられています。

当時は頼母子（たのもし）が行われていたという記述があります。

文久三年（一八六三年）には、三日市と連名で福引興行を願い出て、客寄せに努めたそうです。



第185回

平成28年

# くんちいち しょうばら 九日市

6月9日 (木)

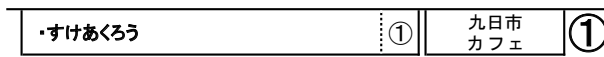
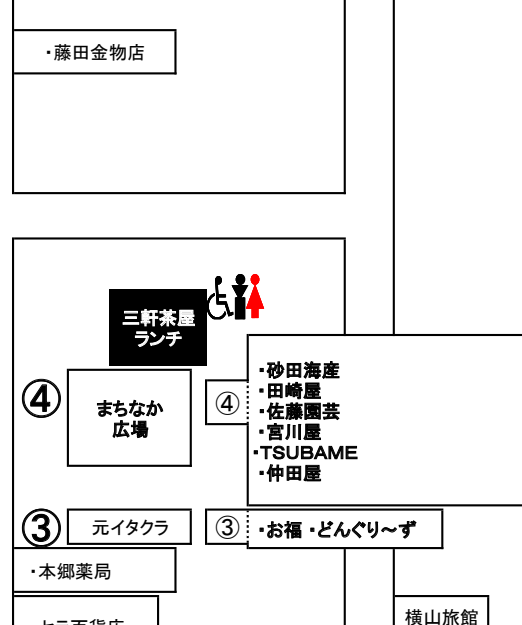
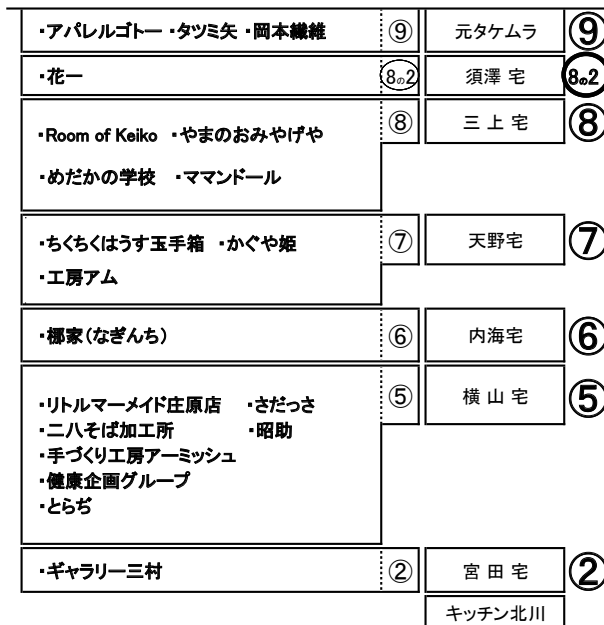
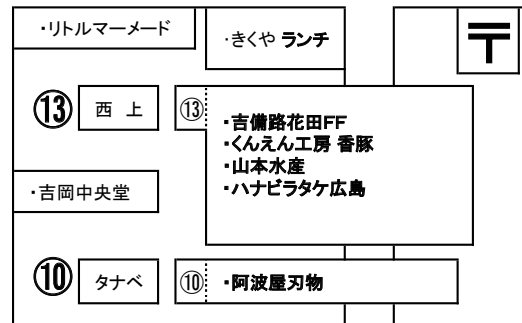
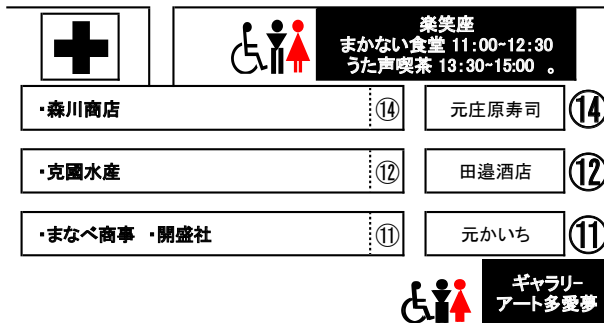
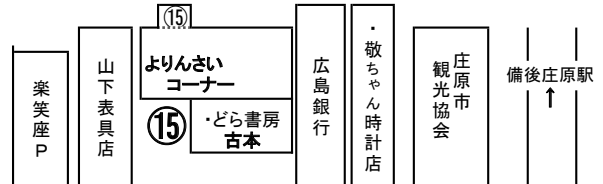
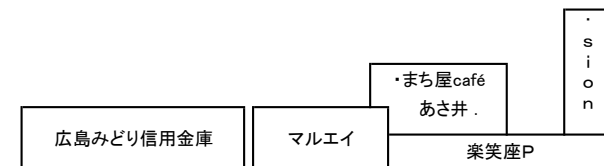
9:00~13:00

## トピックス

★市民ギャラリー「アート多愛夢」では  
第8回 里呼織工房作品展  
とき 6月8日(水)~10日(金) 10時~16時

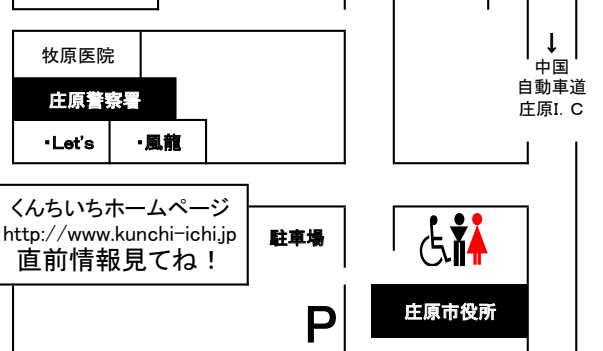
★どら書房さん...営業時間9:30~19:00  
毎週火曜日と第1, 3月曜日はお休みです

★風龍さん...九日市スペシャル! 餃子200円!



当日の天候により、断り無く  
出店者・出店場所に変更する場合があります。

出店申込みは、  
【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース 1,000円~  
九日市愛好会事務局  
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽笑座 内  
TEL / FAX (0824) 72-8285



くんちいちホームページ  
http://www.kunchi-ichi.jp  
直前情報見てね!